アウクスブルク滞在記

杉野　愛子

１．はじめに

私は尼崎市青年使節団の一員として尼崎市の姉妹都市であるドイツのアウクスブルクへ訪問した。滞在期間は８日間、移動を含めると 10 日間の訪問であった。そこで経験したことや印象に残ったことを本滞在記として記録する。

２．１日目

約２０時間のフライトを終え、アウクスブルクでまず行ったことはホストファミリーとの対面式である。飛行機に乗っている間も、空港からバスでアウクスブルクへ向かう道中も、私はドイツへ来たという実感がまったくなかったが、いざホストファミリーと対面するとなったとたんに緊張し始めた。これから１週間を共に過ごす人たちとうまくやっていけるかどうか不安で仕方なかった。そんな私に対してホストファミリーは温かく迎え入れてくれた。対面後、すぐに家に帰ると思いきやジェラートを一緒に食べに行ったり、おしゃれなカフェに連れて行ってくれたりした。家に帰ってからも花や果物を育てている庭を見せてくれたり、飼っている猫とあそんだりと、私を歓迎してくれている雰囲気をひしひしと感じた。このホストファミリーからの歓迎と受入のおかげで、私はこのアウクスブルク滞在がよりよいものになったと思う。

３．２日目

この日の予定はディーゼル記念石庭苑、尼崎の名前が付けられた通り、日本庭園がある植物園、低所得者のための集合施設であるフッガーライの視察だった。最も印象に残っているのは昼食のメニューである。それは「クルステンプラーテ」という豚肉の皮をカリカリに焼いた豚肉料理とじゃが芋でできた餅のような食感のお団子、日本ではあまり見ない大きさのイチゴケーキだった。初日の夜はフライトの疲労で何も口にせず、朝はヨーグルトとホストファミリーがいれてくれたコーヒーだけで済ませた私は、思っていたよりも充実しているスケジュールのおかげでお腹が空いていた。そんな私でも食べきれない量の昼食だった。そこで初めて私は海外にいるのだなと感じられた。味はとても美味しかった。豚肉はジューシーで柔らかく、かけられたソースは照り焼きソースのようで馴染みのある味だった。ケーキはいちごもスポンジもほどよい甘さで、側面についているナッツがいいアクセントになっていた。じゃが芋でできた餅のような食感のお団子は、初めて食べたが、よくわからない味だった。

４．３日目

３日目は最も忙しいスケジュールだった。朝一番にスーツを着て集合し、きらびやかなホールでアウクスブルク市副市長へ表敬訪問をした。今回の滞在に関わっているすべての方に感謝すると同時に、この派遣を自分の糧にしないといけないと改めて

決意し、背筋が伸びる会合であった。その会場には飲み物が用意されており、テレビで見るパーティー会場のようで嬉しくなった。そのフレーバーがハーブと果物という奇妙な組み合わせで３種類用意されていた。一見美味しくなさそうな組み合わせだったが意外と美味しかった。会合の後は小さな市場へ行って日本ではあまり見られない野菜や果物を試食させていただいた。特にブラックベリーが美味しかった。その後は市立図書館の視察、ドイツの伝統衣装であるディアンドルの試着、人形劇団プッペンキステへの訪問、日独協会の方々と夕食を作るという１日だった。

５．４日目

アウクスブルクから車で１時間半ほどの距離にあるフュッセンを訪れた。緑豊かな公園を歩き、遊具で遊んだ。自然に囲まれて爽やかな空気のなかを歩くことができた。昼食は公園近くのレストランで、「ケーセシュペッツェレ」を食べた。チーズが大量に使われたショートパスタのような伝統料理だ。チーズが濃厚で美味しかったが、この日あたりから日本食が恋しくなってきていた。その後、ノイシュヴァンシュタイン城とヴィースの巡礼教会へ訪れた。この２つは以前個人的に訪れたことがあり、そのときと変わらない美しさであった。特にヴィースの巡礼教会は天井一面に描かれた絵が目を見張る美しさで、一日中それを眺めて座っていたくなる。教会の周りに民家はなく、草原にぽつんと建っている雰囲気も、教会の荘厳さを引き立てている。この日は自然や歴史的建築物から、再び始まる学びの毎日に向けてエネルギーを補充できた。

６．５日目

この日は最初にhalle116という第二次世界大戦中に使用された強制収容所とアウクスブルク大学の視察、大学内のレストランで昼食後、繊維博物館とWWKアリーナの視察という日程だった。特に印象に残っているのはWWKアリーナである。普段は入ることが出来ない場所をたくさん見せていただいた。例えば、報道陣がスタジアムをカメラで映すための場所や選手の控え室、ベンチを見学した。私は日本でサッカースタジアムに行くことはあまりないため、普通はできない体験をたくさんさせていただいた。

７．６日目

午前中はアウクスブルクの水道施設と職業訓練センターの視察、午後は送別会という日程だった。水道施設は町中にあり、一見水道施設とはわからない綺麗な建物だった。以前は水を管理する親方やその弟子が住み込みで働いていたそうである。職業訓練センターでは、引きこもりや社会生活にうまく馴染めなかった人達が様々な職種の訓練ができる施設である。洗濯や園芸、パソコンを扱う事務関係など訓練可能な職種は非常に幅広く、寮や食堂もあった。訓練をしている様子を見学したが、実技がほとんどで実践的な内容の訓練を行っていた。午後からは送別会が開かれ、夕食をホストファミリーや他の団員のファミリーと一緒にいただいた。そのときに食べたサラダがとても美味しかった。ドレッシングはおそらくバルサミコ酢で、葉物野菜と一緒に入

っていたクスクスが良いアクセントになっていた。飲み物は水かアルコールかコーヒーしかないところにビール大国であるドイツを感じられた。送別会では日本の使節団からの出し物が慣例となっており、私たちの日常生活の一コマを映像にして、その内容をクイズにした。映像が止まってしまうハプニングもあったが、最終的には会場の皆さんに楽しんでいただけたと思う。日本での準備を頑張って良かった。一仕事を終えほっとした。

８．７日目

この日はホストファミリーと過ごす一日である。私のホストファミリーはミュンヘンへ連れて行ってくれた。最初にミュンヘンから少し離れたダッハウ強制収容所を訪れた。そこはナチスが 1933 年に設立した最初の常設強制収容所で、囚人の収容だけでなく人体実験も行われていた。見学のための料金は必要ない。その理由はすべての人にこの残酷な歴史を知ってもらい二度と同じことが起こらないようにするためだそうだ。ドイツで起こった過去の歴史を深く後悔し、未来へ継がないというドイツ人たちの意思を感じた。その後、ミュンヘンにある「ホフブロイハウス」で昼食を取った。天井が高く開放感がある場所で、生演奏もあった。観光客に人気らしく、人がたくさんいて非常に混み合っていた。そこではカツレツに甘いジャムが添えられたシュニッチェルを食べた。人気店であることが頷けるおいしさだった。その後はオクトーバーフェストの時期に売られるハート型のクッキーを探したり、市庁舎を見たり、伝統衣装であるディアンドルが売られている服屋に行ったり、とミュンヘン観光を楽しんだ。ホストファミリーとゆっくり過ごせる日はこの日が最後で、8 日目の帰国を残すのみとなった。帰国はさみしさもあったが、ホストファミリーと日本でまた会う約束をした。このご縁が続いていけば良いと思う。

９．最後に

アウクスブルクで過ごした 8 日間は、素晴らしい日々だった。毎日新しい学びと経験の連続で、楽しくてしょうがなかった。このような機会を与えてくれたアウクスブルク市と尼崎市の関係者の皆様、10 日間一緒にいていろんなことを共有した青年使節団の皆様、緊張していた私を温かく迎え入れてくれたホストファミリーへ心から感謝したい。本当にありがとうございました。アウクスブルクと尼崎の交流がこれからもずっと続くことを願っている。